七ﾆX 587
155
588

深江遠廣謹述

祝祭日略解 全

惟神學會發兌

特29
558

文部省令第四號(六月十七日官報)

明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令第十五條ニ基キ小學校ニ於ケル祝日大祭日ノ儀式ニ關スル規程ヲ設クルコト左ノ如シ

明治二十四年六月十七日　文部大臣伯爵大木喬任

小學校祝日大祭日儀式規程

第一條　紀元節、天長節、元始祭、神嘗祭及新嘗祭ノ日ニ於テハ學校長、教員及生徒一同式場ニ參集シテ左ノ儀式ヲ行

一　學校長教員及生徒

天皇陛下及

皇后陛下ノ　御影ニ對シ奉リ最敬禮ヲ行ヒ且　兩陛

下ノ萬歳ヲ奉祝ス

但未タ御影ヲ拝戴セサル學校ニ於テハ本文前段ノ式ヲ省ク

二 學校長若クハ教員、教育ニ關スル　勅語ヲ奉讀ス

三 學校長若クハ教員、恭シク教育ニ關スル　勅語ニ基キ聖意ノ在ル所ヲ誨告シ又ハ歴代天皇ノ盛徳鴻業ヲ叙シ若クハ祝日大祭日ノ由來ヲ叙スル等其祝日大祭日ニ相應スル演説ヲ爲シ忠君愛國ノ志氣ヲ涵養センコトヲ務ム

四 學校長、教員及生徒、其祝日大祭日ニ相應スル唱歌ヲ合唱ス

第二條 孝明天皇祭、春季皇靈祭、神武天皇祭及秋季皇靈祭ノ日ニ於テハ學校長、教員生徒一同式場ニ參集シテ第一條第三款及第四款ノ儀式ヲ行フヘシ

第三條 一月一日ニ於テハ學校長、教員及生徒一同式場ニ參集シテ第一條第一款及第四款ノ儀式ヲ行フヘシ

第四條 第一條ニ掲クル祝日大祭日ニ於テハ便宜ニ從ヒ學校長及教員、生徒ヲ率ヰテ體操場ニ臨ミ若クハ野外ニ出テ遊戯體操ヲ行フ等生徒ノ心情ヲシテ快活ナラシメンコトヲ務ムヘシ

第五條 市町村長其他學事ニ關係アル市町村吏員ハ成ルヘク祝日大祭日ノ儀式ニ列スヘシ

第六條 式場ノ都合ヲ計リ生徒ノ父母親戚及其他市町村住民ヲシテ祝日大祭日ノ儀式ヲ參觀スルコトヲ得セシ

第七條　祝日大祭日ニ於テ生徒ニ茶菓又ハ教育上ニ裨益アル繪畫等ヲ與フルハ妨ナシ

第八條　祝日大祭日ノ儀式ニ關スル次第等ハ府縣知事之ヲ規定スヘシ

文部省令第四號參照

勅令第三百十五號小學校令（明治三十三年十月七日官報）抄錄

第十五條　小學校ノ毎週教授時間ノ制限及祝日大祭日ノ儀式等ニ關シテハ文部大臣之ヲ規定ス

祝祭日略解

深江遠廣謹述

夫レ祭事ハ、國家ノ大典ナリ。貴賤男女ノ別ナク、苟モ生ヲ此土ニ稟クル者、恒ニ其ノ由來ヲ記臆シテ忘ル可カラザル者ナリ。　皇室ノ尊嚴ナル所以モ、之ニ依テ知ル可ク、國體ノ鞏固ナル所以モ、之ニ依テ知ルヘシ。今ヤ文部省令第四號ヲ以テ、小學校ニ於ル祝日大祭日ノ儀式ニ就キ發布セラレタル、規程第一條第三項ニ、學校長、若クハ敎員、敎育ニ關スル勅語ニ基キ、　聖意ノ在ル所ヲ誨告シ、又　歷代天皇ノ　盛德、　鴻業ヲ叙シ、若クハ祝日大祭日ノ由來ヲ叙スル等、其祝日大祭日ニ相應スル演說ヲ爲シ、忠君愛國ノ志氣ヲ涵養センコトヲ務ム、

トアリ。嗚呼美ナル哉。余先キニ　勅語ノ注解ヲ稿シ、今又祝祭日略解ヲ作ル。

〇四方拜　一月一日

元旦午前四時、天皇陛下、伊勢神宮ヲ始メ奉リ、天神地祇四方ノ諸神社、及山陵ヲ遙拜アラセラレ、國家ノ安寧ヲ祈リ給フ、之ヲ四方拜トイフ。宇多天皇御記ニ、仁和五年正月元日寅ノ刻ニ、天地四方山陵ヲ拜シ給ヒシ由見エタル、是ナリ。又臨時ノ御拜アリ、皇極天皇、南淵ニ於テ、雨ヲ祈リテ四方拜ヲ行ハセ給ヒシコト、御記ニ見エタル、是ナリ。其ノ濫觴ハ、何ノ御時ニアリシヤ詳ナラズト雖ドモ、宇多天皇實錄ニ、寛平二年正月朔旦、四方拜如例、トアルヲ思フニ、猶以前ヨリ御定例アリシコト明ナリ。異本弘安禮節ニ、大和比咩世記ヲ

引キテ、垂仁天皇十一年壬寅正月朔日、主上四方ノ春光ヲ拜ストアルヲ四方拜ノ起原ト云ヒ、四季物語ニハ、崇神天皇ノ三年ニ始レル由見エタリ。按フニ崇神天皇六年紀ニ曰、先是天照大神、倭大國魂二神、並祭於天皇大殿之內、然畏其神勢、共住不安、故以天照大神託豐鍬入姬命、祭於倭笠縫邑、仍立磯城神籬、亦以日本大國魂神、託渟名城入姬命祭、トアリテ、遙拜ノコト是ノ時ニ起ルベキハ當然ナリ。而シテ朝廷ニハ、古來石灰壇ニ於テ、毎朝ノ御拜モアリタリ。又四方拜ハ、往古ハ上御一人ノミニアラズ、大臣以下ト雖モ、一般ニ行ヒタリシヲ、近世トナリテ、上御一人ノ歲首ノ御拜ヲノミ、四方拜ト稱スルコト、ナレリ。

〇元始祭　一月三日

賢所、并皇靈殿、及神殿ヲ御親祭アラセラレ、歳首ニ皇位ノ本始ヲ祝ハセ給フ御祭祀ナリ。此ノ御祭ハ、明治三年ニ始マリ、同四年ニ其ノ例ヲ追ヒ。同五年ニ元始祭ノ名稱起リ、爾後御定例ノ祭事トナレリ。

○新年宴會　一月五日

往古ハ、正月中ニ、元日、七日白馬、十六日踏歌、三節會アリシガ、維新後之レヲ廢シ、特ニ此ノ宴會ヲ興シ、以テ新年ノ大祝日トナシ、親王以下諸臣ニ酺宴ヲ賜フ。但シ他ニ祭事アラズ。

○孝明天皇祭　一月三十日

御親祭ナリ、御神樂アリ。又京都後月輪ノ山陵ニ、勅使參向アリ。　孝明天皇ハ、　今上ノ皇考ニ坐マス、御諱ハ統仁（ヲサヒト）尊ト稱ス。崩御ノ日ヲ以テ、嚴肅ナル御祭祀ヲ行ハセ給フナ

リ。當御祭日、并ニ仁孝天皇、光格天皇、後桃園天皇ノ御祭日ハ、他ノ御祭日御祝日トハ異ナルナリ。故ニ臣民タル者モ、國忌ノ例ニ隨ヒ、謹肅アルベキコトニコソ。

○祈年祭班幣　二月四日

五穀豐熟ヲ、天神地祇ニ祈リ乞ハセ給フ祭ナリ。其ノ起源未タ詳ナラズト雖モ、蓋シ上古ヨリノ御祭事ナラム。古事根源ニ、天武天皇四年ニ始マル由云ヘレド據ルニ足ラズ。何トナレバ延喜祝詞式ニ、御年神（ミトシノカミ）ニ白馬白猪白鷄ヲ奉ルコトアリ。其ノ濫觴ハ、即チ神代大地主神（オホトコヌシノカミ）ノ故事ニ因レルコトナレバナリ。其ノ儀ハ、神祇令義解ニ、欲レ使ニ歳災不レ起、時令順レ度ニ、即チ於ニ神祇官ニ祭ル、ト見エ。延喜神名式ニ載スル所ノ、三千一百三十二座ノ内、大社三百四座、小社四百三十三座ハ官幣ヲ奉

ラレ、餘ノ二千百九十五座ハ、國幣ヲ奉ラル。其ノ式ノ大略ハ、本日卯刻、所司庶事ヲ辨備シ、神祇官ニ幣物ヲ陳テ、同官人入リテ座ニ着キ、大臣以下入リテ座ニ着ク、次ニ神部諸社ノ祝部ヲ率テ座ニ着ク、次ニ大臣以下下リテ廳前ノ座ニ着ク、中臣進テ祝詞ヲ讀ミ了テ退ク、大臣以下拍手兩段、拜了テ本座ニ復ス、神祇伯幣帛ヲ班ト命ス、忌部二人、神部二人進テ案ヲ夾ミテ立ツ、神祇ノ史次ヲ以テ諸社ノ祝部ヲ呼ビ、神部幣ヲ取リテ之ヲ班ツ、史座ニ復シ幣ヲ班チ畢ヌト申ス、右訖リテ退出ス。國司ノ祈年祭ハ、長官以下集リテ祭ル。其ノ儀神祇官ニ准フトアリ。當今ハ式部職ニ於テ班幣ノ儀アリ。伊勢神宮ヘハ、當日勅使發遣アリ、自餘ノ官國幣社ノ幣帛ハ、所管ノ地方廳ヘ遞送セラル、故ニ猶之ヲ班幣トイフ、

宮中ニテハ、皇靈殿ノ御祭アリ。賢所、神殿ノ祈年祭ハ、伊勢神宮ト同日、即チ十七日ニ行ハル。官國幣社ハ、幣物到着ノ日、地方長官之ヲ點撿シ、長官或ハ高等官、幣使トシテ參向シ、式ヲ行フ、定日ナシ。

○紀元節　二月十一日

神武天皇即位ノ大典ヲ行ハセ給ヒシ、其ノ歲ヲ紀元ト云ヒ、其ノ日ヲ紀元節ト云フ。即チ寶祚ノ元始ヲ祝ヒ御親祭アラセ給フ。御神樂アリ。全國ノ臣民、亦擧テ奉祝ヲナスノ日ニシテ、大祝日ナリ。

○神宮祈年祭奉幣　二月十七日

去ル四日發遣ノ勅使、祈年ノ幣帛ヲ奉ル御祭祀ナリ、當日宮中ニ於テハ、賢所幷神殿ニ祈年ノ御祭祀アリ。

○仁孝天皇祭　二月廿一日

御親祭ナリ。仁孝天皇ハ、今上ノ皇祖父ニ座マス、御諱ハ惠仁尊ト稱シ奉ル。

○春季皇靈殿神殿祭　三月春分

歷朝ノ皇靈祭ナリ。從前ハ年中ニ、御年忌祭、及御正辰祭等、數百ノ御祭事アリシヲ、維新以來古ニ復サセ給ヒ、春秋二季ニ集メ、此ノ大祭ヲ行ハセ給フ也。又同日賢所神殿ノ御祭祀アリ、共ニ御親祭ニシテ、東遊アリ。抑春秋祭祀ノ濫觴ハ、日本紀神代卷ニ、伊弉冉尊云云神退去矣云云祭此神之魂者、花時以花祭、又用鼓吹幡旗歌舞而祭、トアル是ナリ。古史通ニ、伊弉冉尊所葬處、每歲暮春、繩作花及幡旗、歌舞而祭之、神世遺俗、トアリ。皇國ニ於テ、春秋ヲ以テ祖先ヲ祭ルコトハ、

神代以來ノ慣習ニシテ、萬古動ス可ラザル者ナリ。猶追加皇靈殿ノ條ヲ參照スヘシ。

○神武天皇祭　四月三日

皇大宗神武天皇、御諱ハ神日本磐余彥尊、崩御ノ御當日ナルヲ以テ、特ニ御親祭アラセラル。東遊アリ。

○神宮月次祭幣帛發遣　六月四日

每年六月十七日、內宮ノ御例祭ナリ。十六日ハ、外宮ノ御例祭ナリ。故ニ四日ヲ以テ幣帛奉獻ノ勅使ヲ發遣セラル。月次トハ、每月ノコトヲ云フ、班幣ハ一年ヲ二分シ、即チ六月ニ於テハ、七月ヨリ十二月ニ至ルマデヲ一期トシ、十二月ニ於テハ、翌年一月ヨリ六月ニ至ルマデヲ一期トシテ、幣物ヲ班チ給フナリ。大寶ノ神祇令季夏月次祭ノ義解ニ云、謂於神

祇官祭ル、與祈年祭同シ、即如庶人宅神祭也、トアリ。又延喜神名式ニ、神名ノ下ニ月次トアルハ、悉此ノ祭ニ預リ給フ神社ナリ。而シテ當今ハ神宮ノミニテ、他ノ神社ニハ班幣ノコトナシ。

○神宮月次祭奉幣　六月十七日

此ノ日、去ル四日發遣ノ勅使、幣帛ヲ奉献シ、月次祭ヲ行フ。

○大祓　六月三十日

上天皇ヨリ、下億兆ニ至ルマデノ大祓ナリ。古ヘハ朱雀門前ニ於テ行ハレ、今ハ宮中賢所ノ前、即幄舎ニ於テ行ハル。先荒世和世ノ竹ヲ以テ、聖躬ヲ度リ奉リ、之ヲ折テ御贖物ニ添ルノ式アリ。之ヲ節折ト云フ。畢テ賢所ノ前、即幄舎ニ於テ、大祓ノ式ヲ行ハシメ給フナリ。古ヘハ親王以下百官百司悉

ク參集シ、又諸國ヨリ出ス所ノ贖物ニ、各定品アリシナリ。今ハ在京ノ親王、并ニ親任官、及勅奏判ノ官員ハ、宮中ノ祓所ニ參集シ、地方官、及庶人ハ、官國幣社、或ハ府縣鄉村社ニ於テ行フ。凡ソ罪アル者、世ニ榮存スルコト能ハザルハ、天地ノ定理ナリ。顯ハレタル犯罪ハ、法律之ヲ處シ、或ハ自ラ贖フコトヲ得ルト雖モ、然ドモ知ズ識ズ冥々ノ中ニ於ケル罪惡ハ、之ヲ大祓ニ委ス、是上世ノ遺法ナリ。依テ上半期ハ六月ニ、下半期ハ十二月ニ此ノ式アルナリ。

○秋季皇靈殿神殿祭　九月秋分

春季祭ニ同シ

○神宮神嘗祭　十月十七日

新穀ノ大御饌供進ノ爲メ、勅使ヲ立ラレ、幣帛及荷前ノ調

絹等ヲ、伊勢神宮ニ奉ラシメ給フ御祭ナリ。延喜式ニ依ルニ、其ノ儀式ハ、畧ミ月次祭ニ同シ。往古ハ、天皇大極殿ノ後房(小安殿)ニ出御アリテ、太神宮ヘ幣帛ヲ奉ラセ給フ御儀式アリ。毎年ノ式ナル故ニ、中古之レヲ例幣ト稱セリ。御使ハ諸王ノ五位以上、及神祇官ノ中臣忌部ノ官人各一人、執幣五人、使ノ從者三人ニテ、各賜物アリシコト、延喜式ニ見エタリ。抑ミ此ノ御祭ハ、上世ヨリノ御式ト見エテ、雄畧天皇ノ御世大御神御夢ニ教ヘ給ハク、吾ガ高天原ニテ見求シ處ニ鎭リ坐シヌ、然レドモ吾レ一所ニノミ坐セバ、甚苦ク、大御饌モ安ク聞食サズ、故レ丹波國比沼ノ眞名井ニ坐ス、吾ガ御饌津神豐受神ヲ、我ガ許ニ欲シト宣メマフニ依リテ、丹波國ヨリ伊勢ノ山田原ニ移シ奉リ給フ、是レ今ノ外宮ノ大神ナリ。(以上倭

姫命世記、御鎭座本記、延暦儀式帳等ニ依ル、)豐受姫神ハ、即チ食物ヲ掌リ給フ神ナリ。抑ミ食ハ、人世須臾モ闕ク可ラサル、最第一ノ要物ナレバ、天照大神殊ニ之レヲ重シ給ヒ、常ニ豐受神ヲ御親ラ祭ラセ給ヒ、且當時神託アリテヨリ、内宮外宮相並ビ普ク德光ヲ施シ、万民ヲ惠ミ給フニ依リ、天皇特ニ此ノ御祭ヲ行ハセ給フコトト知ルベシ。

○天長節　十一月三日

天皇ノ御誕辰ナルヲ以テ、寶壽ノ長久ヲ祝ハセ給フ節會ニシテ、即チ一大祝日ナリ。此ノ日　賢所、皇靈殿、神殿ノ三前ニ、御祭ヲ行ハシメ給ヒ、又親王及諸臣ニ祝宴ヲ賜フ。類聚國史ニ、光仁天皇寶龜六年九月壬寅、勅ス、十月十三日、是レ朕ガ生日、毎レ至ニ此辰一、感慶兼集ル、宜レ令ニ諸寺ノ僧尼ヲシテ、毎レ年是日轉經行

道、海內諸國、並宜斷居、內外百官、賜酺宴一日、仍名此日為天長節、庶使廻斯功德、度奉先慈、以此慶情普被天下、十月癸酉、天長節、大酺群臣、獻翫好酒食、宴畢賜祿有差、トアル是濫觴ナリ。以後每年ノ定例ナリシモ、近世廢絕ニ屬シタルヲ、明治ノ聖代トナリテ、復興シ給ヘルナリ。但光仁天皇ノ御時ハ、佛道ノ盛ナリシガ故ニ、轉經行道、或ハ斷居殺ナドアリシナリ。明治トナリテハ、列祖ノ皇靈ヲ皆神ト齋奉リ給フ御世ナルコトヲ能ク覺ルベキナリ。因ニ按フニ天長ト云コトハ、老子ニ天長地久ナドノ語アリ。又唐代ニ天子ノ誕辰ヲ千秋節ト云シヲ、天長節ト改メタリト云ヘリ。皇朝ニテモ此ノ稱ヲ採リ給ヘルモノナリ。詔ニ萬民ノ父母トシテ、天下ヲ治メ給フ　君上ノ御誕辰ナレハ、臣民タルモ

ノ、謹テ寶壽ヲ祝ヒ奉ラズバアル可カラズ。

○新嘗祭班幣　十一月十日

神宮以下官國幣社ニ新穀供進ノ為メ、宮內省ニ於テ幣帛神饌等ヲ頒ツノ日ナル。故ニ班幣ト云フ。但神宮ヘハ、特ニ勅使ヲ遣ハサル。此ノ日祭事ナシ。

○鎭魂祭　十一月二十二日

天皇、幷ニ皇太后宮、皇后宮春宮ノ御鎭魂祭ナリ。鎭魂トハ、令義解ニ、鎭安也、人陽氣曰魂、魂運也、言招離遊之運魂、鎭身躰之中府、故曰鎭魂、トアリ。是皇朝ノ古義ニシテ、遠ク神代ニ起原ス。古語拾遺曰、凡鎭魂之儀者、天細女命之遺跡ト。又舊事紀ニ、饒速日命ノ遺傳ヲ載タル等ニ就テモ知ルヽナリ。古式ハ、十一月中ノ寅日晡時ニ、宮中ニテ行ハセ給ヒ、十

二月四日ニ至リテ、神祇官ノ齋戸ニ鎮メ給ヒシナリ。今ハ神祇官ナケレバ、宮中ノミノ御式ナリ。又延喜式ニ依ルニ、東宮ハ巳ノ日ニ行ハレシモ、今ハ御同日ニアリ。

○新嘗祭　十一月二十三日

新嘗祭ハ、神代ニ天照大御神、天狹田長田ノ稻穗ヲ以テ、新嘗ヲ聞食ケル事、日本紀、古事紀、古語拾遺等ニ見エタル、是レ始メナリ。天孫降臨ノ時、大御神高天原ニ御シメシ、齋庭ノ穗ヲ授ケテ降シ給ヒシヨリ、毎年此ノ御祭アリシト聞エテ、年中ノ最大祭ナリ。依テ宮中ニ於テハ、天皇、神嘉殿ニ出御アリテ、新穀ノ御饌等ヲ、御親ラ神祇ニ供シ給ヒ、上ニモ御直會ノ御式アラセラル。其ノ御式最嚴肅ニシテ、今日猶古義ヲ全ク存シ給ヘルコト、蓋シ此レニ過ギタルハナシ。實ニ國家ノ大祭ナリ。依テ諸國ニテモ、伊勢神宮以下、官國幣社ハ、去十日發遣ノ幣帛奉獻アリ、神宮ハ勅使、其ノ他ハ地方ノ知事、及高等官幣使トシテ參向ス。又府縣郷村社ニ至マテ、總テ式部ヨリ頒布セラレタル祭式ニ準ヘテ、當日此ノ祭祀ヲ行フ。又全國一般臣民ノ報賽ヲナスノ古例ナルコトハ、萬葉集ニ「たれそこの家の戸おそふる。新嘗に我が夫をやりて、祝ふ此の戸を」トアルニテ明カニ知ル、ナリ。近世トナリテ、諸國ニ新嘗ノ稱ハ廢レタレドモ、地方ニヨリテハ供日ト唱ヘテ、所ノ産土神ヲ祭リ來ルアリ。蓋シ是レ新嘗祭ヨリ傳リ來レル者ニテ、古意古風ノ未タ全ク廢レザルモノナリ。

○神宮月次祭幣帛發遣　十二月四日

○神宮月次祭奉幣　十二月十七日

六月ニ同シ。

○後桃園天皇祭　十二月六日

御親祭ナリ。後桃園天皇ハ。今上ノ皇高祖ニ座シマス、御諱ハ英仁尊ト稱シ奉ル。

○光格天皇祭　十二月十一日

御親祭ナリ。光格天皇ハ、今上ノ皇曾祖ニ座シマス、御諱ハ兼仁尊ト稱シ奉ル。

○大祓　十二月三十一日

六月ニ同シ。

追加

○中央賢所御由來

賢所ハ、天照大神ノ神殿ニシテ、日本紀略ニ、賢所トアル是ナリ。又扶桑畧記ニ威所ニ作リ、御堂關白記ニ尊所、小右記ニ恐所、中右記ニ畏所ニ作ル。共ニ「カシコトコロ」ト訓ス。又禁秘御抄ニ、凡禁中作法、先神事後他事、旦暮敬神之叡慮無懈怠、白地以神宮幷内侍所不爲御跡、トアル内侍所ハ、即賢所ニシテ、主ト内侍官ノ奉仕セルヨリノ御稱ナリ。其ノ起原ヲ古史ニ徴サムニ、日本書紀曰、天照大神手持寶鏡、授天忍穗耳尊、祝之曰吾兒視此寶鏡、當猶視吾、可與同床共殿以爲齋鏡、ト又古事記曰、於是副賜其遠岐斯八尺勾璁鏡及草那藝劍、而詔者、此之鏡者專爲我御魂、而如拜吾前、伊都伎奉、

トアリテ、天孫降臨ヨリ崇神天皇六年ニ至マテハ、歴々宮中ニ鎮座アリシナリ。即同天皇六年紀曰、先是天照大神倭大國魂二神、並祭於天皇大殿之内、然畏其神勢共住不安、故以天照大神託豐鍬入姫命祭於倭笠縫邑、仍立磯城神籬云云、トアリ。(後ニハ眞ノ御鏡ハ伊勢ニ鎮座ス、是太神宮ナリ。又御劍ハ景行天皇ノ御世、尾張ニ鎮座ス是熱田神宮ナリ。)

此ノ時新ニ鏡劍ヲ御摸造アリテ、温明殿ニ御鎮座アラセラレタリ。而シテ歴朝禁中ニ、別ニ一段ヲ設ケテ鎮齋マシマシシヲ、明治二年御遷都ト同時ニ、舊假皇居ニ遷座アラセラレタリ。而シテ明治四年辛未九月十四日、詔シテ、新ニ神殿ヲ造リ、神器、及神祇省中ニ鎮座スル所ノ　列聖ノ皇靈ヲ、禁中ニ奉安シ給ヘリ。其ノ　詔ニ曰ク、

朕恭ク惟ルニ　神器ハ　天祖威靈ノ憑ル所歴世　聖皇ノ奉シテ以テ天職ヲ治メ玉フ所ノ者ナリ今ヤ朕不逮ヲ以テ復古ノ運ニ際シ忝ク鴻緒ヲ承ク新ニ神殿ヲ造リ神器ト列聖皇靈トヲコヽニ奉安シ仰テ以テ萬機ノ政ヲ視ント欲ス爾群卿百僚其レ斯旨ヲ體セヨ、ト以テ知ルヘシ。然ルニ同六年皇居炎上ニテ、暫ク赤坂假皇居ニ御遷座トナリ。又皇城御造營成ルヲ以テ、去ル二十二年御移轉ト同時ニ、當賢所ニ御遷座ナラセ給ヘリ。當今賢所ニハ御鏡ノミ鎮齋アラセラレ、劍璽ハ宮中ノ劍璽ノ間ニ奉安坐マシテ、朝夕ノ御拜ヲ闕セ給ハズ。賢所ノ御親拜モ毎朝ノコトナレドモ、稀ニハ從侍長等ヲシテ、御代拜ヲナサシメ給フコトモアラセラル、ヤニ承ル。

○西殿皇靈殿御由來

皇靈殿ハ、　皇太宗神武天皇ヲ首座トシ、　歴代ノ皇靈、並ニ后妃及皇親ノ御靈等ヲ鎭齋シ給ヘル所ナリ。神代ノ大祖天照大神ハ、伊勢熱田並ニ賢所ニ鎭齋シ給ヒ、造化三神陰陽二靈ハ、神殿及官社ニ齋（イツキ）奉リ給ヒ、神代ノ天皇、即チ瓊々杵尊（霧島神宮）彦火火出見尊（鹿見島神宮）鸕鷀草葺不合尊（鵜戸神宮）等モ、特ニ官祭アラセラル、ヲ以テ、皇靈殿ニハ拜祭シ給ハザルナリ。抑中古以後、佛法盛ニ行ハレ、國喪國忌等、都テ佛法ニ依ラセラレ、畏クモ　聖靈ノ尊キヲ以テ、彼ノ佛豎僧侶輩ノ左右ニ委ネ奉リ、　聖體ヲ荼毘ニ掛ケ奉リシ等ハ、實ニ千歳ノ今日ニ於テ、追懷スルモ慣慨ニ勝ザル所ナリ。而シテ　後光明天皇崩御ノ時ヨリ、荼毘ノ弊

習ヲ止メ給ヒ。又維新トナリテ、皇國固有ノ禮典ニ復サセ給ヘルハ、天運循還ニ因ルト雖モ、然レドモ我ガ　聖明ノ　御鴻德ノ然ラシムル所ニシテ、欽仰シ奉ルニ外アラザルナリ。即チ明治ノ初メ、　皇靈ヲ神祇官ニ奉安セシメ給ヒ、又明治四年ニ、　詔シテ、神祇省（是ヨリ先キ官ヲ省ト爲ス）ヨリ　賢所へ遷シ奉リ給ヘリ。其ノ　詔文ハ、載セテ　賢所ノ條ニアリ。　詔書ノ副書ニ云、今般別紙詔書ノ通被仰出候ニ付テハ、追テ神殿御造立迄、現今神祇省中御鎭坐ノ皇靈、當分賢所へ被爲遷候事、トアルニテ知ルベシ。又同十一年六月五日、太政官達第二十二號ヲ以テ、官院省使府縣へ發布セラレタル布達ニ云、　綏靖天皇以下、後櫻町天皇迄、御歴代御式年、御正辰祭典被廢更ニ春秋二季祭被置、神武天皇ヲ

御正席トシ、先帝迄御歴代、幷ニ后妃以下皇親、御合祭被執行候條、此旨相達候事、但神武天皇、及後桃園天皇以下、御近陵御式年御正辰、並ニ其后妃皇親御配享ノ儀ハ、猶從前ノ通被執行候事、春季皇靈祭、（春分日、）秋季皇靈祭、（秋分日、）トアリ。實ニ絶タルヲ繼キ廢タルヲ興シ、以テ遺ナク、漏ナク、嚴肅ニ祭祀ヲ行ハセ給フナリ。臣民タル者、亦矜式スル所ナクバアル可ラズ。

○（東殿）神殿御由來

神殿ハ、八神幷ニ天神地祇八百萬神ヲ鎭齋シ給ヘル所ナリ。其ノ八神ハ神祇官ニ祭ル所ノ神ニシテ、延喜式ニ神祇官西院ニ坐ス云云、御巫祭神八座、（並大、月次、新嘗、中宮、東宮、御巫亦同、）神產日神（神皇產靈神）高御產日神（高皇產靈神）玉積產日神（天御中主神、以上謂ユル造化三神ナリ、）生產日神（伊弉冉神）足產日神（伊弉諾神、以上謂ユル陰陽二靈ナリ、）大宮賣神、御食津神、事代主神ノ八座ナリ。此ノ八神ヲ祭ル起原ヲ溫ヌルニ、日本書紀曰、高皇產靈尊、因勅曰、吾則起樹天津神籬、天津磐境、當為吾孫奉齋矣、汝天兒屋命、太玉命、宜持天津神籬降於葦原中國、亦為吾孫奉齋焉、トアル是起原ナリ。神籬ハ八座ノ神位ヲ云ヒ、磐境ハ、神位ヲ安置スル神壇ヲ云フナリ。而シテ中臣齋部ノ兩氏、祭法ヲ天祖ニ受ケ、世々聖躬ヲ萬歲ニ奉祝シ、寶祚ヲ無窮ニ擁護シ來ル所ノ大典ニシテ、三種ノ神器即チ賢所ハ、天皇御親ラ必之ヲ齋キ奉リ給ヒ。八神即チ神祇官ハ、輔弼ノ大臣之ヲ齋キ奉ル可キ原由ナリ。因テ列朝神祇官ヲ以テ、政廳ノ首上ニ置レタルナリ。維新ノ初メ神祇

官ヲ置カレタルモ、又下シテ省トナシ、暫クニシテ廢セラレタリ。是ノ時ニ際シテ、八神及天神地祇八百萬神ヲ宮中ニ遷シテ、賢所ニ鎭座ナシ奉リ給ヘリ。即チ明治五年壬申三月十八日ノ布告ニ曰、元神祇省御鎭座ノ天神地祇八神兩坐、宮中ヘ御遷坐被仰出候事、　但當分賢所御拜所ヘ御鎭坐ノ事ト、而シテ同年十一月二十七日ノ布告ニ、是迄宮中八神殿ニ於テ、　天神地祇及八神兩坐ニ御祭被爲在候處、自今　天神地祇八神御合併、八神殿ノ稱ヲ廢シ、更ニ神殿ト可稱旨被仰出候事、トアリ。此ノ如キ理由ナルノミナラズ、賢所ノ東殿ニ鎭リ坐ヲ以テ、賢所、神殿、皇靈殿ト序シ奉ルヘキコトナレドモ、是ヨリ先キ皇靈ハ既ニ御遷坐ナシ奉リ給ヒシ故ニ、其ノ御遷坐ノ順序ノマヽ、宮中ニテハ賢所

皇靈殿神殿ト稱シ奉リ給フヤニ承リヌ。因テ今之ニ倣ヘリ

謹テ按フニ、前ニ掲クル所ノ　皇祖天神ノ天壤無窮ノ神勅ト、神籬磐境ノ神訓トハ、是レ宇宙ノ大道ナリ。君臣ノ分萬古ニ亘リテ變セザル、之ニ因テ立チ、祭祀ノ典モ之ニ因テ立チ、忠孝ノ誼モ之ニ因テ立ツ。是即チ國體ノ尊嚴ナル所以ニシテ、歷世ノ君臣共ニ相傳ヘテ以テ今日ニ至レリ。而シテ　今上天皇既ニ神勅神訓ヲ奉シ給ヒテ、祭事ヲ忽ニシ給ハザルコト此ノ如シ。然ラバ則チ上ハ公卿百官ヨリ、下ハ庶人ニ至ルマデ、皆宜シク　聖旨ニ遵據シテ、我ガ神孫神民ノ名義ニ背カサラム事ヲ勤ムベシ。徒ニ世路ニ媚ヒ、風潮ニ順ヒ、本ヲ忘レ始ヲ遺レテ、至嚴至正ノ天法ヲ蔑

如スルコト勿レ。

明治二十四年七月卅日印刷
同　二十四年八月卅日出版

版權登錄

發行所　惟神學會

著者兼發行者　長崎縣士族　深江遠廣
東京市麹町區永田町二丁目三十番地寄留

印刷者　長崎縣士族　浦英夫
京橋區銀座一丁目廿三番地寄留

發賣舖　山本米太郎
芝區芝口三丁目十番地

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍

ex 587

29

16

特
5

014122−000−4

特29−558

祝祭日略解

深江　遠広／著

M24

ABB−0395